

第1弾は、海を越えてガーナからお迎えした国分敏子さん

■今回はガーナで活動されている国分さんをお迎えしての対談の第4回目となります。前回は女子力は生命力、姿勢が大切だというお話がありました。ではその姿勢を良くするためのには？というところを今回はお伝えいたします。

正しい姿勢を作るパーカッションワークシヨップ

榎田：人生100年時代って言うけれど、僕は寿命はどんどん縮まってくると思っている。姿勢の大切さは理屈では説明できないし、いい姿勢になったときの快感のようなものを伝えてあげる先生がいないから。どうしたらいいかなと思った時に、ジャンベを使ったパーカッションのワークシヨップを思いついた。楽器を弾くときは姿勢が悪いと良い音が出ない。何かやるときはそれに集中できる身体がつくられる。パーカッション奏者は皆姿勢が良いから、これだ！と思ったんです。ジャンベって手で叩く打楽器の中では音が出やすいでも身体が上手に使えてるときは、良い音は出ないんです。良い音が出ると、本能的に気持ちがいい。だから、良い音を出そう、出そうとし始めると姿勢がよくなるという原理を発見したんです。

https://www.youtube.com/watch?v=Ng8Jucru1・式方小学校のワークシヨップの映像

現代は、お母さん・お父さんが、3歳くらいまでにやるべき非言語コミュニケーション力の育成が出来ないままになっている。それが今の日本の子供の自己肯定感の低さに現れているように思えるんです。オリンピックの

経済・テクノロジー専門委員をやっている関係で、小中高と教えているけど、学年が上がると自己肯定感が下がっていく。打楽器の授業で（初心者向けに）いきなりフレーズとかできないでしょ。先生二人はものすごくかっこいい音を出さなければ。そこに良い音を出して参加して、と伝えると、良い音出した！と集中するので、姿勢が良くなってきます。こういうことをやっていくと、自然に姿勢が良くなってくるんです。鎌倉市の小学校全員に取り入れたいといういな。

ジャパニーズスタイルの教室

榎田：とにかく僕はSystem1教育を普及させたいんです。国分さんはそろばんを通して、そういうことをやっていらっしゃるんじゃないかな。あれって、計算機じゃないから。

国分：そうですね、ガーナの子供達って昔から、おんぶされている状態から、足を広げて、その状態で猫背になってそろばんをはじくんです。それを見つければ後は後ろから襲いかかります（笑）

榎田：棒じゃなくて、丸太で？

国分：違いますよ、平手打ちで近づくと、足を広げてる子が「あつ、トシコが来た」って姿勢を直すんです。「ジャパニーズスタイルにしなさい！」って。「Abacus」って英語でそろばんのことなんですけど、幼児が100まで数える道具と訳されている物もあります。最初に子供達にそろばんを見せるときには、「これはcalculatorだけ、トシコの国の物で私が教えるから、SOROBANって言うんだよ」ガーナの子

供は英語ではなく、SOROBANと言います。そろばんをする時は、必ず足を閉じなさいと教えています。姿勢ができていなければ、バシッと両手で指導します。背中も叩きます。猫背はよくないよ！

榎田：それ、本能ですね。何を教えなきゃいけないかが、本能でわかってくる。

国分：そうですね、本能過ぎますね。

榎田：本能過ぎるって初めて聞きましたよ（笑）美しく生きるために、本能過ぎること

も必要。今日の名言ですね（笑）
国分：そろばんだけではなく、授業でハサミを使った後に、刃先を向けて返す子がいるんですよ。そのときは、「ターンして、ジャパニーズスタイルで返しなさい」って教えます。昔は、投げて返された。それはね、徹底し



て許さなかったですね。今は、刃先を向けて返す子がいたら、周りの子供が先に気がついて、ジェスチャーして教えている。

ミス・ワールドファイナリストの講師として

国分：今日のキーワードで、「美女と美人の違い」や「事実や真実の違い」というのがありました。私は、ここ数年、ミス・ワールドジャパンのファイナリスト30人に対して講師を務めていただいています。タイトルが「Beauty is the purpose for 目的ある美」

明日その講師をやるんです。ミス・ワールドの講師になってから、「何で国分さんがなれるの？ミスでもないのに、あの容姿で」と言う声で最初は聞こえてきたんですけど、最近自信を持って言えるのは、自分の中の揺るぎない思いがあるからこそ、ミス・ワールドの講師としてお話をさせていただけることがある。誇りですし、嬉しいことです。まさに今日、「美女と美人の違い」を聞いて、そっか、それだよ、そういうことがあって、呼ばれてるんだなと。

榎田：ファイナリスト30名の前でお話しされていると分かると思うんですけど、（ミス・インターナショナルの審査の際、世界から70人も美女が来る。すると何が美女なのかわからなくなるの。不思議な気持ちになるんですよ。そのときに、見た目では選べない。じゃあ、何で選ぶかと言えは「美意識」なんです。美意識って「真・善・美」の3つ。倫理もあれば、感性もあるでしょう。国分：ファイナリストの皆さんには「ガーナ



て納得してもらえないようにこの名前にしたんです。第1弾でミス繋がりで、アフリカツながりだし。

国分：まさか、まさか、アフリカのキーワードで繋がってるなんて。

榎田：ほんと、行くだけで命がけですけど、国分：そう、行くだけで命がけですけど、行っても何年も進まないし、まだまだ分かっていない部分もあるのかなと感じます。

榎田：組織的な教育をどういうふうにつけていくかですよ、メソッドだけでなくスクールとしてやっていくしかない。そのスクールも商売をくつつける。ここまで勉強したら、こういう仕事ができますよ。すぐに飯が食える仕事もあるけど、もう少し先のビジネスも失敗させながらやっていく。

昨今の日本、信じられない事件

国分：ガーナで、日本で起きている小中学生の事件を見るたびに、子供達にもっと失敗をさせて、人の心や、体の痛みを教えることが大事なんだとガーナに住みながら、感じていきますね。それがわからないから、簡単に人をいじめたり、殺めたりしてしまふ。

榎田：ちよっと信じられない、ひどい事件が京都で起こったんですけれど、話してもどうしてそうだったかわからない。それはSystem1の問題なんです。

System2で論じてわかることではない。本当に危険な領域にまでできてるなと思います。これはね、学校自体を変えないといけない。それは、先生が悪い、親が悪いとか言ったら一歩も話が進まないから、「悪い」は消して、子供の為に良いところを集めて、そこを

見ていけば。「良い」を光として集めるって大事だと思えます。美人特区は、最初から大きな責任が出てきましたよ。これしっかり編集して、伝えていけたら、内輪のものから、パブリックなものになると思う。

■今回は、いよいよ対談の最終回。ガーナで子供たちにそろばんを教えている国分さんが、日本がガーナから学ぶべきことをお伝えくださいます。

